東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

ディベート活動の導入実践報告：検定教科書を活用した帯活動としての "1 on 1 Ping-Pong Debate Practice"

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-03-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 加藤,淳
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/152377

東京学芸大学附属高等学校紀要　57　pp.77～80，2019

ディベート活動の導入実践報告

― 検定教科書を活用した帯活動としての“1 on 1 Ping-Pong Debate Practice”―

A Teaching Report：Introduction of Debate into an English Expression Ⅰ classroom

英語科　加　藤　　淳

＜要旨＞

ディベートは、高等学校学習指導要領において、英語表現Ⅰ・Ⅱの授業で推奨されている授業活動の一つである。しかしながら、実際の授業でその指導が行われている割合は非常に低い。本稿では、通常の授業で帯活動として取り組むことができる“1 on 1 Ping－Pong Debate Practice”の授業実践の報告を行う。生徒の発話量の試行的な測定や生徒の情意面に対する調査から、本実践は想定した効果を産出している可能性を示唆している。一方で、本実践を研究レベルにまで引き上げ、エビデンスに基づいた効果の検証を行うことが求められる。

＜キーワード＞　ディベート　教科書活用　帯活動　ピンポンディベート　ミニディベート

１．実践の課題と背景

１－１　実践の課題

本実践の課題は、高等学校における通常の英語の授業において、ディベート活動を導入するための効果的で効率的な指導実践の在り方を模索することである。ここでいう「通常の英語の授業」とは、イベント的に学期や年度に一度行ったり、通常使う教科書から離れてスポット的に扱ったりする授業ではない、年間を通じて教員が毎回行う、教科書を指導する通常の授業のことである。なお、本実践を行なったのは英語表現Ⅰの授業においてである。また、本実践でのディベートとは即興型のパーラメンタリーディベートを指している。

１－２　実践の背景

１－２－１　各種調査から

本実践の課題背景には、「ディベートは難しい」というディベートに対する生徒の抵抗感と、「ディベート指導は難しい」というディベート指導に対する教員の抵抗感がある。2013 年度から適用されている高等学校学習指導要領（文部科学省，2010）において新設された「英語表現」では、「事実を様々な角度から見て、論理的に思考し、表現する能力を養う」ことが目標とされており、授業活動としてディスカッションやディベートを行うことが想定されている。しかしながら、Benesse（2016）によれば、高校の授業においてディベートを「よく行う」「ときどき行う」と回答した教員は全体の 5.3% にすぎない。これは、上位項目である音読（94.7%）や発音指導（92.3%）、文法の説明（89.4%）と比べるまでもなく、余りにも低い数値である。また、筆者が本校生徒に対して 2017 年（高２対象）と 2019 年（高１対象）に行った調査では、「ディベートは難しそうだ」と回答した生徒が７割おり、依然としてディベートは生徒にとっても心的距離の遠い活動であることがうかがえる。

実際に筆者自身の経験から考えても、ディベート指導は確かにハードルが高い。耳慣れない専門用語が少なくないこと、ルールが複雑そうで難しそうに感じることなどは、ディベート指導を敬遠したくなる理由の一つだろう。また、実際に授業でディベートを行うには授業時間一時間丸々を要する場合がほとんどである。ただでさえ指導項目の多い通常授業の時間内にディベートの指導まで別途行うことは不可能であり、その意欲すら湧かないことも多いものと思われる。ディベートが養成する力が少なくない（中川、須田 2017）中、生徒がディベート活動を経験する回数を増やすためにも、教員が気軽にディベート指導を行う方法はないだろうか。本実践の出発点はここにある。

ディベート活動は、次期学習指導要領で新たに設置される科目「論理・表現」において、スピーチやプレゼンテーション・ディスカッションと並んで、授業の軸とされている活動である。教科書が変わるなどすれば指導のあり方は大きく変わるかもしれないが、教員が前もって徐々にその指導に慣れておくことは必要であろうし、むしろそれが急務であろう。

１－２－２　本校の事情

また、本校の特殊事情として、週２回ある１年次の英語表現Ⅰの授業は、日本人教員による授業１コマとネイ

ティブとのTTによるオーラル・コミュニケーションの授業1コマのハイブリッドスタイルで進められている。すなわち教科書を使用して授業を進める時間は日本人教員が担当する週に1回しかない上、副教材としてGrammar in Use（Cambridge University Press）も併用して指導しているため、実際に検定教科書の指導に割くことができる時間は週にせいぜい20～25分程度である。このように限られた時間の中であるから、ディベートのために特別な授業を行うということは到底不可能である。それでもディベート指導の必要性から、帯活動としてのミニディベート体験を積み重ねる実践を模索するに至った。

2．先行実践・研究の検討

上述のBenesse（2016）で見たように授業での実施率が低いディベート活動であるが、全国の教員によって多くの実践や研究が積み重ねられていることも事実である。例えば須田（2018, 2017）は、勤務校での自身の指導経験の積み重ねから、その効果と重要性、指導のノウハウを伝えているし、金谷（2017）は、コミュニケーション英語の授業において、扱うレッスンによって授業時数に軽重をつけ、時間をかけるレッスンにおいて教科書を活用したディベート活動を提案している。また、中川（2017）はディベートの一通りの実施方法や使用するハンドアウト、そして導入的な指導方法までを過不足なく伝えている。さらに小林（2019）は、自作のテキストにおいて、教材集とともに、誰にでも取り組むことができる形で指導カリキュラムを提示している。しかしながら、これらの実践はやはり授業時間一コマ分を要したり、ルールの説明や定型表現の習熟にどうしても時間がかかったりと、学校設定科目やイベント・スポット的に行う授業ではない通常の授業で行うには敷居が高い。一方で、市川（2018）はその論考の中で、高専の学生が対象ながら、これらの課題を克服すべく、いわゆるSummary & Refuteの手法を用いた「ミニディベート」の授業実践を試みている。しかしながら、このような指導実践でも、上述したような本校の特殊事情を鑑みると、その実施は容易ではない部分が多い。

本授業実践はこれらの課題の克服を目指すという意味において意義深く、通常の授業で帯活動としてディベートの練習をするという点において、独自性がある。

3．実践方法

以上の理由から、本実践においては①検定教科書を使い、②通常の授業の一連の流れの中で、③短時間（帯活動として）でディベート活動につなげるための導入実践を試みた。

3－1　対象

対象生徒：本校1年生2クラス
学級規模：40名、42名（習熟度別などではない）
授業科目：英語表現Ⅰ

3－2　教材について

『Mainstream English Expression Ⅰ』（増進堂）

教科書に提示されている順番通りに授業をするだけで、聞く・読む・話す・書くという4技能の伸長を望むことができる構成となっている。3つに分かれたPartが進むにつれコンテンツが豊富になり、Part 1では1レッスンあたり2ページだったところ、Part 2, 3では6ページに及び、指導マニュアル上では配当授業時間数が1レッスンあたり4時間になる。しかし本校ではそれを1時間の授業で、しかも半分の時間で扱わねばならない。

3－3　実践内容

毎回の授業では、まず各レッスンのModel Dialogをペアワークで習熟させる。続いて、各レッスンに出てくる表現の中でディベートに使用できそうなフレーズを取り出し口頭練習をする。最後に、各レッスンの話題を題材とした論題を提示し、繰り返し“1 on 1 Ping－Pong Debate Practice”（4-3参照）を行う。これはピンポンディベート（同参照）の手法を基本としているが、この手法を用いる理由は、筆者のこれまでのディベート実践に対する生徒へのアンケート結果から、「相手の言ったことを聞き取ってその場で即興で言い返すこと（反駁）」を最も難しく感じる生徒が多かったからで、これを重点的に練習することがディベートへの抵抗感を減らし、ディベートのスキルを上げることに繋がるだろうと考えたからである。

なお、教科書の各レッスンの内容（タイトル）とそこから派生させて設定したディベートの論題は、以下の表1の通りである。「これでなければならない」という特別な論題ではなく、生徒の興味を引くもの、練習した表現を使う機会がありそうな論題であれば何でも良い。最優先事項は、“You said ～. But …”という相手の発話の繰り返し及び反駁のトレーニングをすることにある。

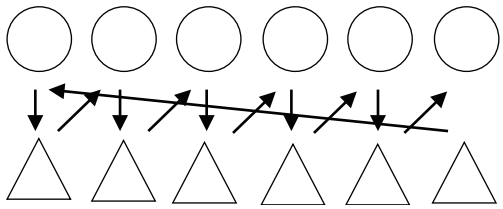
課	レッスンタイトル	設定した論題
2	What Kind of Music Do You Like?	Music Is Better Than Books
3	My Treasure	An Old School Building Is Better Than New
4	This Coming Weekend	Going to a Concert Is Better Than Going to *Karaoke*
5	Subject I'm Taking	English Is The Most Important Subject of All.
6	Are You in a Club?	You Should Join a club Activity
7	The School Festival Is Soon	The 3rd Grader Should Perform a Drama at Our School Festival
9	The Store I Often Go to	Convenience Stores Should Open for 24 hours

※ Lesson 1（1 学期初回授業）は挨拶、Lesson 8（2 学期初回授業）は道案内で、ともに学期初回授業であったので帯活動を行わなかった。

≪表 1　教科書のトピックとディベートの論題≫

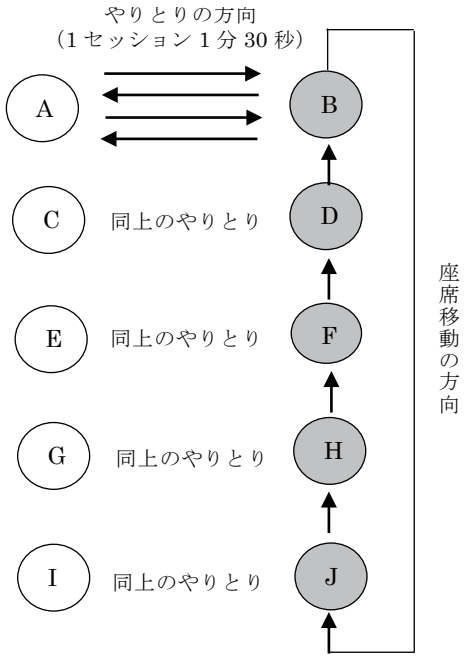
4－2　“1 on 1 Ping-Pong Debate Practice”とは

松本（2001）によれば、ピンポン・ディベートとは生徒全員を 2 列で座らせ、向かいの生徒を前列と後列とで肯定側と否定側に分け、交互に意見を述べていく発話の型である（図 1 参照）。中川（2017）や市川（2018）では同じような活動が「ミニディベート」と称されており、「1 ～ 3 人程度で、1 人 30 秒から 1 分程度のスピーチを「肯定、否定、肯定……」の順で行う」ことで、即興的な反論と立論の訓練を行うことが意図されている。



≪図 1　「ピンポン・ディベート」（松本，2001）≫

これに対し、“1 on 1 Ping-Pong Debate Practice”とは、筆者が本実践の課題に即し従来のピンポン・ディベートに若干のアレンジを加えたもので、具体的には以下の図 2 のような形式である。



≪必ず使うことになっている表現≫
※（　）内は教科書掲出のレッスン番号
You said ～.　(L3)
It might be true, but～.　(L5)
I'm not saying you are wrong, but～.　(L5)

≪図 2　“1 on 1 Ping-Pong Debate Practice”≫

まず 1 回あたりのペア活動の制限時間は、1 分 30 秒に設定する。じゃんけんで勝った方が論題に対して肯定的な立場で発話する。それを受けて、じゃんけんで負けた方が“You said ～.”と相手の主張を繰り返した上で“But ～.”と反駁し、その上で自分の意見を述べる。それを受けて、A が B と同様の発話を繰り返し、またそれを B が受ける…という流れである。ペアを替えて 3 ～ 5 回繰り返す。繰り返す中で、肯定・否定の反対の立場になることもあれば、同じ主張を繰り返すこともある。同じ主張を繰り返せばそれだけ表現が習熟するし、反対の立場になればペアが使っていた表現を参考にすることもできる。この一連の、表現の練習、ペアでの複数回の対戦という流れで、指導時間はおよそ 10 分である。

5．実践の振り返りと課題

本実践の簡単な効果測定を行うため、対象の 2 クラスにおいて、これらの指導を踏まえて実際に授業一時間を使ってスポット的に試合形式のディベート授業を行った。統制群として“1 on 1 Ping-Pong Debate Practice”を行わなかったクラスでも、同様の授業を行った。まずは発話量について、ワードカウンター（西，2010）を用

いて試行的に測定したところ、指導を行ったクラス（平均 150wpm）、統制群（平均 148wpm）と大きな差はなかった。しかし、実践を行ったクラスでは「ディベートは難しそうだ」と回答した生徒の割合も指導を行ったクラスは 18% にとどまるなど、統制群（73%）との差は明白であった。また、教員からのルール説明においても、指導を行ったクラスの方は 5 分程度で説明が済んだところ、統制群は 10 分以上かかった上に理解が行き届いていなかった。以上のことから、本実践は、発話量には大きな影響を及ぼさないものの、提示した課題を克服するために有効な実践であるとという可能性を示唆している。

一方で、発話量には影響を及ぼさなかったことから、どのような実践がディベートにおける発話量に影響を与えるのか、さらなる模索が必要である。また、分析対象を増やすことによってより多くの有効データを収集し、分析と考察を続けることも求められる。そのことによって、よりよい実践の在り方も見えてくることだろう。

ところで、ディベート指導のさらなる充実を図るためには、指導法の充実もさることながら、まずは教員自身がディベートを体験してみることも必要不可欠である（須田（2017））。筆者自身もワークショップでディベートを体験し、その有用性を実感してから指導に当たるようになったが、ステップさえ踏めば中学生に対しても実践は十分に可能であった。なお、Benesse（2016）によると中学教員が授業でディベートを「よく行う」「ときどき行う」と回答したのは、3.9% である。

最後に、ディベートの授業が終わった直後、休み時間になってもその論題についてや相手が言ったことについて嬉々として話し合いを続ける生徒たちの様子は、大変印象的で感動的でもある。英語習得のための一つの方法としてのディベートのより幅広い普及に向け、引き続き試行錯誤を重ねていきたい。

≪参考文献・HP ≫

Benesse『中高の英語指導に関する実態調査 2015』ベネッセコーポレーション，2016 年

市川裕理「“即興で話す”力につなげるディベート実践」『中部地区英語教育学会紀要 47 巻』pp.149-156，2018 年

金谷憲編著『レッスンごとに教科書の扱いを変える TANABU Model とは』アルク，2017 年

小林良裕『英語ディベート－高校授業用テキスト（教員用）－』S.A.D. Works，2019 年

須田智之「即興型英語ディベートによる英語授業実践報告：本校 65 期生・66 期生の授業実践を振り返って」『筑波大学附属駒場論集 56 集』pp.143-155，2017 年

須田智之「即興型ディベートによる英語学習の動機付けに関する研究」*EIKEN BULLETIN Vol.30*，2018 年

中川智皓 他『授業でできる即興型英語ディベート』パーラメンタリーディベート人材育成協会（ネリーズ出版），2017 年

西巌弘『即興で話す英語力を鍛える！ワードカウンターを活用した驚異のスピーキング活動 22 』明治図書，2010 年

松本茂『日本語ディベートの技法』七寶出版，2010 年

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編、英語編』開隆堂出版，2010 年